

〈新刊紹介〉

馬場良二著

『João Rodriguez 『ARTE GRANDE』の成立と分析』

本書は、2013年6月に東京外国語大学から学位が授与された博士論文であり、João RodriguezのARTE GRANDE (ARTE DA LIGOA DE IAPAM)の成立の背景と、言語内容の分析、現存する2本の比較、原本と土井忠生訳『日本大文典』(1955年、三省堂)とのローマ字表記の異同等について論じている。

本書の構成は、次の通りである。「はじめに」、「ポルトガル語原文からの転写と訳について」に続き、「第1章 文典成立の歴史のおよび言語的背景」、「第2章 ラテン語学の与えた影響」、「第3章 ADVERBIO「副詞」について」、「第4章 elegancia, elegante, elegantemente」、「第5章 sonsonete」、「第6章 lingua, linguagem, palavra」、「第7章 Bodleian本とCrawford本」、「第8章 DE INSTITVTIONE GRAMMATICAとARTE GRANDEとにおける日本語引用例の対照」、「第9章 Bodleian本と訳本とのローマ字つづりの異同」、「第10章 おわりに」から成る。「謝辞」と「参考文献」が付く。

なお、本書は、平成26年度科学研究費助成事業(研究成果公開促進費)の助成を受けて出版された。

(2015年1月31日発行 風間書房刊 A5判横組み 408頁 12,000円+税 ISBN 978-4-7599-2058-1)

小林賢次著

『中世語彙語史論考』

本書は、本学会会長在任中の2013年6月29日に逝去された著者・小林賢次氏が出版を予定して目次構成をつくり、入力データおよび抜刷りを用意していたものを基に、小林千草氏が編集したものである。2004~12年に発表された論文11本と1977年に発表された4本とを、主内容によりI~IVの4部に配した計15章と、書評など計4本を取めた付章から成り、「あとがき」と、本書成立の経緯と各論文執筆の背景とを記した小林千草氏による〈編集後記〉とを添える。

本書の構成は、次の通りである。I「質問表現における「聞ク」とその類語」に、「狂言台本における「聞ク」と「問フ」「尋ヌル」,「「聞ク」と「尋ヌ」の語史—古代語における〈質問〉の意味の成立をめぐって—,「「聞ク」と「尋ヌ」の展開—中世における〈質問〉の意味の拡大をめぐって—,「質問表現における「聞ク」と「問フ」「尋ヌル」—室町時代から近世前期上方語まで—, II「類義語の史的考察」に、「セハシ(忙)の成立とセバシ(狭)」、「オ

ソロシ(恐)とコハシ(怖・強)——狂言台本における様相——, 「コハシ(怖)の成立と展開——中世から近世前期上方語まで——」, 「物狂(ぶっきやう)」と「軽忽(きやうこつ)」——狂言台本における使用状況を中心に——, III「否定推量・否定意志の表現」に, 「院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラズ」, 「院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現——ジ・マジ・ベカラズの周辺——」, 「ベシトモ覚エズ」考, 「室町時代における否定推量・否定意志の表現」, IV「文体と資料」に, 「反語表現における文語性と口語性——元和卯月本謡曲と大蔵虎明本狂言とを比較して——」, 「中世語資料としての『一遍上人語録』『他阿上人法語』——モノクサ・サバクル・イロフなど——」, 「清原宣賢系論語抄について——書院部蔵「魯論抄」の本文の性格をめぐる——」の各章を収め, 「付章」として, 「富樫広蔭自筆本並びに自筆書入本『詞玉橋』について」, 「〔書評〕出雲朝子著『中世後期語論考』」, 「〔書評〕染谷裕子著『お伽草子の国語学研究』」, 「『日本語学』名著との出会い」が続き, 「あとがき」・「編集後記」・「索引」を添える。

(2015年6月29日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 398頁 9,000円+税 ISBN 978-4-7924-1433-7)

小野正弘著

『感じる言葉オノマトペ』

本書は, オノマトペの意味変化を30語の例を通して説明したものである。50音順に配列された辞典の形態をとりながらも, 辞典とは異なるこの書の特徴が用例の掲げ方にある。オノマトペを含む一文だけでなく前後の文も掲げることによって, オノマトペがそこに用いられた理由や効果を考察できるよう工夫されている。また, 近世以前の用例には新たに現代語訳を付している点, 各節のまとめとしてそれぞれの意味変化の流れを図で示している点も特徴的であり, 一般読者や言語学・日本語学を専攻して間もない学生だけでなく, さまざまな学術的関心に対応する書である。

本書の構成は次の通りである。「本書の構成」, 「オノマトペの意味変化—イントロダクション」, 「第一節 いらいら」, 「第二節 うか うっかり」, 「第三節 からから がらがら」, 「第四節 かん かあん がん があん」, 「第五節 きりきり ぎりぎり」, 「第六節 さくさく ざくざく さっくり ざっくり」, 「第七節 ぞっ」, 「第八節 どきどき」, 「第九節 のたり のたのた のろろ のろい」, 「第十節 はたはた ばたばた ぱたぱた」, 「第十一節 ふわふわ」, 「第十二節 ほのほの」, 「第十三節 むかつく むかむか」, 「第十四節 めろめろ」, 「第十五節 よよ」, 「第十六節 わくわく」。末尾に参考・引用文献一覧とあとがきを付す。本書は, 角川選書シリーズ561として出版された。

(2015年8月25日発行 KADOKAWA / 角川学芸出版刊 四六判縦組み 256頁 1,700円+税 ISBN 978-4-0470-3561-4)

佐藤亮一著

『滅びゆく日本の方言』

本書は、NHK ラジオ深夜便（2010～2015年）「くらしの中のことば」において著者が話した内容をもとに書き下ろされたものであり、日本の伝統方言を個別的に取り上げ、テーマ別に解説を付した書である。ここに掲げられた方言の多くは国立国語研究所編『日本言語地図』（1966～1975年）から、また、文法的特徴に用いられた方言は『方言文法全国地図』（1989～2006年）から取り上げている。本書の終章においては、生き残る方言や新方言、災害と方言の関わりといった方言の機能やその変化に触れ、方言を取り巻く最新の状況を一般読者にも分かりやすく説明する。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」、「I 方言とはなにか」、「II 自然」、「III 食物・料理・味」、「IV 人間・生活」、「V 動植物」、「VI 遊戯」、「VII 文法的特徴の地域差」、「VIII 方言の現在」。末尾に引用文献を付す。

（2015年9月10日発行 新日本出版社刊 四六判縦組み 202頁 1,500円＋税 ISBN 978-4-4060-5930-5）

孫建軍著

『近代日本語の起源——幕末明治初期につくられた新漢語——』

本書は、中国語借用語に関する研究がまだ多く見られないことを指摘し、日本幕末維新期に成立した社会科学用語を対象に、漢訳洋書との影響関係を分析しながらその形成過程における新漢語発生のメカニズムや伝播のルート、定着過程の解明を試みる書である。本書は著者が2002年11月に国際基督教大学大学院比較文化研究科に提出した博士学位論文「日本語彙の近代——幕末維新期新漢語の成立に見られる漢訳洋書の影響——」をもとにまとめられた。

本書の構成は次の通り。「序章」には「第1節 研究の目的」、「第2節 新漢語と日中語彙交流における研究の歩み」、「第3節 新漢語の時期と範囲」、「第4節 本書の構成」。「第1章 漢訳洋書の伝来と近代日本語」には、「第1節 漢訳洋書と近代中国語」、「第2節 漢訳洋書の和刻と近代中国語の移入」。「第2章 西洋認識の用語の成立」には、「第1節 西洋化の用語」、「第2節 西洋国名の表記」。「第3章 政治・法律用語の成立」には「第1節 政治用語」、「第2節 法律用語」。「第4章 三つの『致富新書』と維新期の経済用語」には、「第1節 三つの『致富新書』」、「第2節 S.R. ブラウンと明六社」、「第3節 『致富新論訳解』に見る維新时期経済書の翻訳事情」、「第4節 明治初期における経済用語の諸相」。「終章」には、「第1節 新漢語成立の九つのドラマ」、「第2節 新漢語研究の新たな展開」、「第3節 人的交流ネットワークの解明」。末尾に、資料、引用資料及び参考文献、あとがき、索引を付す。

（2015年9月10日発行 早稲田大学出版部刊 A5判横組み 324頁 3,700円＋税 ISBN 978-4-657-

15012-7)

宮岡伯人著

『「語」とはなにか・再考——日本語文法と「文字のおとしあな陥穽」——』

本書は、前著『「語」とはなにか——エスキモー語から日本語をみる——』（2002年、三省堂）の続編として、言語を、文からの「分節」の方向ではなく、カタチとしての「語」からの「結節」の方向で考える著者が、伝統的な日本語文法での「付属語」の「おおまかさ」を、「語」を構成する一部としての「接辞」と「語」の一種である「接語」とを区別して整理することを中心に、「語」とはなにかを論じたものである。

本書の構成は、次の通りである。「第1章 衰退の一途をたどる世界の言語」,「第2章 言語はカタチにあり」,「第3章 カタチとしての「語」」,「第4章 「語」とその構成:「助動詞」と「助詞」」,「第5章 「語」をこえた「拘束句」」,「第6章 言語記述と文法」。「参考文献」,「主要人名索引」,「事項名索引」,「あとがき」が付く。

<https://www.sanseido-publ.co.jp/publ/gen/gen2lang/gonanisaik/>

(2015年10月1日発行 三省堂刊 A5判横組み 432頁 5,700円+税 ISBN 978-4-385-36093-5)

二戸麻砂彦著

『節用文字の音注研究』

本書は、お茶の水図書館蔵（成賢堂文庫旧蔵）『節用文字』が掲載する各種の音注を集約して一覧となし、それに分析を加えて、その特徴を明らかにすることを目的とする。【序論】と、2011～13年に発表された4本の論文をもとにしながら増補改訂された3篇の【本論】とから成る。

本書の構成は、次の通りである。【序論】「節用文字の概要と音注」には、「本書の目的と構成」,「節用文字の概要」,「掲出語の錯綜」,「節用文字に付載された音注」の各節。【本論, 第1篇】「節用文字の反切と同音字注」には、「節用文字の反切と切韻系韻書」,「節用文字の反切と玉篇」,「節用文字の反切と類聚名義抄」,「節用文字の同音字注」。【本論, 第2篇】「節用文字の仮名反切」には、「節用文字の仮名反切一覧」,「仮名反切の位置〔標準形式〕」,「仮名反切の位置〔変則形式〕」。【本論, 第3篇】「節用文字の仮名音注」には、「節用文字付載の仮名音注」,「仮名音注の韻母別考察」,「Ⅰ 韻類 [-a系の字音的特徴・-ɶ系の字音的特徴]」,「Ⅱ 韻類 [-a系の字音的特徴・-e系の字音的特徴]」,「Ⅲ A 韻類 [-ia系の字音的特徴・-iɶ系の字音的特徴・-ie系の字音的特徴]」,「Ⅲ B 韻類 [-ia系の字音的特徴・-ie系の字音的特徴・-ie系の字音的特徴]」,「仮名音注の声母別考察 [p-系, pj-系(唇音)・t-系(舌頭音・半舌音)・t̚-系(舌上音)・ts-系(歯頭音)・ts̚-系(正歯音二等, 歯上音)・tʂ-系(正歯音三等)・k-系, kj-系(牙喉音)・声母別考察による仮名音注の対応]」,「仮名音注と仮名反切の機能分担」。「あとがき」と「索引」が付く。

荘司育子著

『日本語の統語的原理——「収束」と「展開」——』

本書は、著者が2014年に大阪大学に提出した博士学位論文「日本語の統語的原理——「収束」と「展開」——」をもとに加筆・修正をしてまとめられた書である。統語的關係を表す概念は「自立語」と「付属語」,「修飾語」と「被修飾語」,「詞」と「辞」といったように二項対立をなしているが、本書ではこうした様々な概念に一貫して通ずる統語的原理として、一つのまとまり(単位)を形成しようとする「収束」と、他のまとまり(単位)に向かって関係をもとうとする「展開」という2つの動的な働きを持つ概念があることを提唱する。

本書の構成は次の通り。「序章」には、「はじめに」,「本研究の目的」。「第一章 統語的關係を表す概念」には、「1.機能語」,「2.文の構成観」,「3.「収束」「展開」という概念」。「第二章 日本語における補文化辞」には、「1.補文化辞の再定義」,「2.形式名詞」,「3.準体法に関する表現」,「4.疑問の助詞「か」」,「5.引用の助詞「と」」,「6.接続助詞」,「副助詞」。「第三章 「収束」と「展開」」には、「1.「収束力」と「展開力」」,「2.文法化」,「3.機能語間での「収束」と「展開」」。「終章」には、「論点のまとめ」,「希望的観測」,「結びにかえて」。末尾に、引用文献一覧とあとがきを付す。

(2015年10月25日発行 大阪大学出版会刊 A5判横組み 202頁 4,900円+税 ISBN 978-4-87259-516-1)

真田信治・友定賢治編

『県別感情表現辞典』

本書は、方言における感情語(65語)について共通の調査票に基づき報告された各都道府県の結果を語彙別にまとめた辞典である。

本辞典では感情語を「気分・情緒面での一次的感情」,「自我感情」,「他人に対する感情」,「美的感情」の4つに大分類する。この辞典は、ただ、「嬉しい」「恥ずかしい」といった一語を方言に変換するのではなく、「元気でまた会えて、本当に(嬉しい)ねえ」のように一文をその地域の言い方に変換する点が大きな特徴である。また、興味深い分布パターンを示した場合には分布地図を付す。

本書の構成は次の通り。「はじめに」,「項目一覧」,「語彙別目次」,「凡例」,「調査地点一覧」,「執筆者一覧」,「気分・情緒面での一次的感情」,「自我感情」,「他人に対する感情」,「美的感情」,「感情語の分布類型」。これらのなかに分布地図とコラムが含まれる。末尾に参考文献一覧を付す。

(2015年10月30日発行 東京堂出版刊 四六判縦組み 288頁 2,800円+税 ISBN 978-4-490-10870-5)

小川晋史編

『琉球のことばの書き方——琉球諸語統一的表記法——』

本書では、奄美から八重山までの方言を統一的な規格で書き表すことができる汎用的な表記法を提案する。本書の表記法に関連したホームページもあり、音声を実際に聞くことができる（URLはwww.ryukyuan-writing.net）。本書の内容は、トヨタ財団2011年度研究助成プログラム「琉球諸語表記法プロジェクト——多様な方言からなる琉球諸語を統一の規格で書き表せる一般向け表記法の構築と今後の普及のための基盤づくり——」（助成番号：D11-R-0009）によるプロジェクトの成果を基にする。

本書の構成は次の通りである。「第1部 表記法の解説」には、「第1章 音の表記」, 「第2章 音の表記一覧」, 「第3章 音の表記の補足」, 「第4章 音の表記以外の約束事」。「第2部 個別方言の表記例」には、「序章」, 「第1章 浦方言（鹿児島県大島郡龍郷町浦）」, 「第2章 湯湾方言（鹿児島県大島郡宇検村湯湾）」, 「第3章 津堅方言（沖縄県うるま市津堅島）」, 「第4章 首里方言（沖縄県那覇市首里）」, 「第5章 大神方言（沖縄県宮古島市平良大神）」, 「第6章 池間方言（沖縄県宮古島市池間島, 佐良浜, 西原）」, 「第7章 佐和田長浜方言（沖縄県宮古島市伊良部）」, 「第8章 多良間方言（沖縄県宮古郡多良間村）」, 「第9章 宮良方言（沖縄県石垣市宮良）」, 「第10章 波照間方言（沖縄県八重山郡竹富町波照間）」, 「第11章 与那国方言（沖縄県八重山郡与那国町）」。末尾に、主要参考文献、かな索引、アルファベット索引、「琉球諸語表記法プロジェクト」について、執筆者一覧を付す。

（2015年11月25日発行 くろしお出版刊 B4判横組み 326頁 2,800円+税 ISBN 978-4-87424-675-7）